

紹介

●古事記及び日本書紀の新研究

津田左右吉著

本書はさきに「神代史の新しい研究」を公にした著者が、早稻田大學史學科に於て其抱持する問題につき講義を試みたるを機會として此にこの書を著し、記紀の一般的性質を論じ、兩書之神武天皇以後仲哀天皇以前の部分に就いて、其記事内容に新解釋を試みんとしたるものなり。其目次を見るに、總論、新羅征討物語、クマン征討の物語、東國及びエミシに關する物語、皇子分布の物語、崇神垂仁二朝の物語、神武天皇東征の物語等の六章より成り、尙附録として三國史記の新羅本紀についての論文を添へたり。本書の目的とする所は、記紀が上代史の資料として觀察する上に於て幾何の價值を有するやを明にし、其記事の内容に對して批判を加へんとするにあるを以て、此書は單純なる古事記日本書紀に就いての研究にもあらず、又記紀による一般上代史の敘述にもあらずして、其目次の示す如く特殊の主題に就いて著者が獨有の見解を陳べたるものなり。著者は記紀の研究に於ては一は本文其ものゝ解釋と一は他の知識によつて記載の内容を批判する二種の必要を説き以て之れに臨まんと期する如し、故に例へば、總論に於ては記

紀兩書の性質を論ずるに於ても、雄略天皇乃至顯宗天皇頃までは二書殆んど同様な性質の天皇御事蹟を記し、繼體紀の記事との間には性質の相異なることを主張し、は其等の記事の根據となりしもの早く存在し、是は舊辭又は本辭と云ふ名の下に、繼體欽明天皇の頃、一度官選せられし史書のありしなるべしと云ひ、或は仲哀照神兩朝の間にも亦記事の材料の上には相違ありしなるべしと云ふが如きを説けり。又日本武尊の蝦夷征討についても記紀の記事の相異は嚴密の批判を施すべきものなりとし、其他同名神社の分布を以て氏族の分布を考へんとする從來の解釋法は、同名の土地が後世同様の神祇の關係に結合附會せしめたることを看過したるものにして是れ本末の顛倒にあらずやと云ひ、或は神武東征が日向より大和に、懸軍萬里遠征を敢行したるは疑問なりとする等まづ本書論法と著書の態度の一斑を窺ふべし、著書全篇を通じては論旨の是非當否は姑く論外なり、著者自らも家言を以て疑問を提出したりと云ふにあるべし。要するに著者の言ふ所は記紀の物語は結局、一後代の帝王及國家の事歴、二民間說話、三當代世俗の事象を以てある意圖の下に聯絡せるもの、其矛盾齟齬多きは、幾多前後聯絡なき潤色と改竄の結果にして、二書の最古の根柢と考へべきものは、恐らく少許の傳説及び四世紀頃より造され初めたる記録等によりしなるべし寧ろ近き世に屬する皇室中心の事蹟を語

れるもの仍て諸種物語は其形成されたる時代の思想、風俗を見、當代の政治、國家觀を窺ふべく、上代國家組織の根本精神の表現として至大の價值あるもの、歴史事實を語る、歴史としてよりも響る詩として見るべし、而も時は歴史よりも却つて國民の内生活を告るものなるを著者根本思想として主張せんとするものなるが如し。  
(洛陽堂發行、價四、五〇) [西川]

● *Frederick Arncliffe: The Old Guilds of England.*  
(Weare & Co. London, 1918)

本書は英國に於けるギルド發達の歴史を簡略に叙述せる冊子にして、専門的研究や獨創の見解を發表せしものにはあられど、往時のギルド生活を一般に亘りて知りしに便宜なる著述なり。先づ諸種のギルド中最初に發達したる宗教的組合 (Religious Guilds) より始めて、商人組合 (Merchant Guilds)、職工組合 (Trade Guilds) の成育を説き、それよりロンドン諸組合建造業組合及び蘇國愛蘭諸組合、大陸諸地方のギルドを觀察して篇を結へり。この著述の特色と視るべきは、他の法制史的經濟史的見地よりせる實質乾燥なる研究書に比し、割合に興味を加へ、文藝作品例へば Chaucer, Shakespeare などの句を引用してギルド組合の實生活を可成活々と讀者の印象に留めんとしたること、諸組合中にても特に職工組合の叙説に重きを置けるとの二點なるべし。尙ギルド組

合のこのみに局限せず、中世英國に於ける經濟生活社會生活、并びに歴世統治者の對都市對商工民政策の一斑も本書の通讀によりて聊か窺知するを得べからん。

*Paul Nicolaitzsch Mitinew: Le Mouvement  
Intellectuel Russe. Traduit du Russe par J.-w.  
Bienstock (Paris 1918)*

ウリヤーン氏は現代露西亞の智識階級中屈指の人物たるを云ふ迄もなし。夙にモスコウ大學出身の學徒として史學社會學に造詣深きのみならず、專制政府に反對して自由民主主義を稱ふる言論界の雄として毎期の國會に重きをなし第一次革命政府の外相たりしこと周知の事實なるべし。本書は前世紀來露西亞社會の指導者啓發者たる位置にある智識階級の運動を論述せるものにして、アタザコフ (Aksakov) に初まり、スタンケウイチ (Stankewitch) ビエリンスキ (Bielinski) ヘルチェン (Hertzen) グラノダスキ (Granowski) の諸氏を列叙して、最後にストラヴ主義の末流たるダニレウスキ (Danilevski) レオニチエフ (Leontiev) ノロウヰエフ (Soloviev) を説き、巻頭別に、十八世紀前半ヘートル二世祖落後に於けるガリチン公 (Galitzine) を中心とする貴族一派の試みたる専斷君主權制限の企畫を論ずる一篇を附せり。各章に亘つて流石に氏一流の明快なる論斷卓拔なる觀察隨處に閃き居れるが如し。